

平成 22 年 5 月 26 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006～2009

課題番号：18330110

研究課題名（和文）

中国内漢族・モンゴル族・朝鮮族の言語文化変容に関する社会言語学的研究

研究課題名（英文）

A Sociolinguistic Study of Acculturation among Han, Mongolian and Koreans in the People's Republic of China

研究代表者

李 守 (LEE Su)

昭和女子大学・人間文化学部・准教授

研究者番号：80276617

研究成果の概要（和文）：多民族・多言語国家である中華人民共和国が、改革・開放政策を採用して約 30 年のあいだに、中国を構成する 56 の諸民族は、それぞれの生活様式に多大な変容をこうむった。モンゴル族と朝鮮族は、漢族とおおむね良好な関係を維持しながら、独自の民族文化を発展させてきたが、市場経済化がもたらす社会の均質化により、各民族自治区域の内部でさえ、民族語の維持がままならないなか、言語維持の方策が試行錯誤されている。

研究成果の概要（英文）：56 nationalities in the People's Republic of China have been subjected to enormous changes in their life style, after China adopted a Reform Openness Policy about 30 years ago. Mongolian and Korean nationalities have developed their ethnic cultures while maintaining good relationship with Han nationality on the whole. Although assimilation among ethnic minorities to Han, the largest nationality in China, is ongoing, language maintenance efforts of various kinds among Mongolian and Korean ethnic groups are being made intently.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2007 年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2008 年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総計	7,300,000	2,190,000	9,490,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：言語学・社会学・中国語・外国語

1. 研究開始当初の背景

中華人民共和国の国内総生産は 2010 年度に世界第二位になることが予想されている。多民族国家である中国において改革開放政

策が実施されて約 30 年が経過した。市場経済の浸透は、民族の伝統的な言語・文化の態様に絶大な影響をおよぼす。

モンゴル族と朝鮮族は建国当初から、共産党の方針を比較的忠実に履行し、教育事業に

も熱心にとりくんだ結果、優秀な人材を多数輩出するなど、諸民族のなかで相対的にめざまれた地位にあった。しかし、かれらが1980年代以降の市場経済化の潮流にうまく適応したとはいえない。かつて農業人口が多数を占めていた朝鮮族のばあい、農村が疲弊した結果、よりよい条件の職をもとめて、住みなれた土地をはなれ、中国国内の大都市、あるいは同一民族の国家である韓国など、国外で就労する事例がふえている。

こうして、人口減を主要因として、さらには少数民族地区へ漢族が大量移入した結果、民族語が通用する空間を、漢語(中国語)が蚕食している。しかし、こうした社会的背景にもかかわらず、モンゴル族と朝鮮族は民族区域自治制度の枠組のなかで、自治政府を中心にして、民族語を維持するための模索をつけている。

2. 研究の目的

中国を構成する56民族(漢族および55の少数民族)の言語・文化は、市場経済化の進行とともに変容をこうむるが、その変容のありかたは、少数民族の側において、その根幹、あるいはその存続さえ動揺しかねないという点で、より顕著である。

(1)北京オリンピックや上海万博の開催が象徴する、国際社会における大国としての地位を構築する過程で、漢族の言語＝漢語(普通話)は「国家通用言語」としての地位を確立した(2001年)。少数民族は市場経済に適応するため、すすんで漢語の学習を自らに課し、かつ民族の言語と文化を維持するため、双語(bilingualism)教育を実践している。

モンゴル族と朝鮮族は、国外にモンゴル国と朝鮮民主主義人民共和国および大韓民国という同族の国家があり、建国以来の少数民族政策のなかで果たしてきた役割という点でも、多くの共通点を有する。このふたつの少数民族はともに最高学府以下の教育体系を構築し、民族語が通用する空間を確保してきた。

市場経済の潮流に適応するためには、民族の優秀な人材が必要とされる。少数民族子弟が中央の難関大学へ入学するためには、漢語(中国語)の学習が不可欠となる。中国政府の方針である双語(二言語)制は、かれらに漢語を学習する強い動機をあたえる。国家通用言語としての漢語の少数民族社会への浸透がどのように進行しているのかを記述することが第一の目的である。

(2)少数民族が中国社会で上昇するための漢語学習は、建国以来、徐々に低年齢化が進行している。同時に、民族語と漢語を習得する双語教育が少数民族子弟にとって過重な負担となるため、民族語の継承を断念し、早期から漢族学校に就学させる親が増えている。このように双語教育は漢語の普及を促進する。モンゴル族と朝鮮族における漢語への転換(shift)は相当程度、進行している。少数民族における双語学習事情の記述が第二の目的である。

(3)漢族と55の少数民族が「中華民族」として多元一体の構造を有するとは、社会学者・費孝通が提唱し、中国少数民族政策の公式見解とされている。この多元一体構造を担保するのは、双語制にほかならない。

少数民族は、「民族区域自治法」(1984年)が規定するとおり、自己の言語文字を使用し発展させる自由を有しながらも、市場経済に適応するため、漢語を自発的に習得するよう、選択をせまられる。モンゴル族と朝鮮族が双語制のもとで漢語を学習しながら民族語の維持・継承をどのように展開しているのかを記録することが本研究の第三の目的である。

3. 研究の方法

研究代表者は夏と春の休暇中、客員研究員として延辺朝鮮族自治州の州都である延吉に所在する延辺大学を拠点にして調査をおこなった。

(1)朝鮮族の現状を調査するに先だち、中国における朝鮮語の言語規範の確立過程を可能なかぎり1次資料によって検証しようとした。朝鮮語の規範化は1945年以降、朝鮮半島の南北政権のもとでも、模索の段階にあり、同じく社会主義体制をとる北朝鮮の言語政策を視野に入れながら、漢語との相克のなかで、朝鮮族は独自の言語規範を確立した。

研究分担者は内モンゴル自治区で内モンゴル大学を拠点にして、双語制とモンゴル語の現状を調査した。漢語とモンゴル語、漢語と朝鮮語の双語制を比較検討することで、市場経済化が進行する中国における言語文化変容、民族政策の特色を分析した。

(2)市場経済化が進行する中国では、漢語の習得が社会的上昇をはたすため必須の条件である。高度経済成長が進行中の社会で、伝統文化が等閑視されがちとなることは、かつて日本や韓国などが経験したこともあり、ひとたび失われてしまえば、それを復元するのは容易なことではない。少数民族にお

いて、伝統の護持と社会的上昇とは、両立がむずかしい。

中国の市場経済化による民族文化の衰退は、日本や韓国のような比較的等質的な社会における伝統の喪失とは比較にならぬほど、徹底的である。もとより、言語や宗教をはじめとする民族文化は時間の経過とともに変容をこうむるものであり、それを強制的な同化とみるか、自然な同化とみるかは、観点によって異なりうる。

しかし、少数民族地域への市場経済の浸透を目標とする「西部大開発」がひきおこす伝統破壊は、着実に少数民族の「漢化」（漢族への同化）をうながしている。開発と伝統という、しばしば二律背反する両側面から、中国における少数民族政策を観察する必要がある。

(3) 社会学者、費孝通が体系化した「中華民族」なる概念は、かつて米国で喧伝された「人種のつぼ」、ソ連邦で提唱された「ソビエト人」と同様、多民族国家を統合する理論として考案されたとおぼしいが、米国でもソ連でも国家統合の理論として、これらのイデオロギーは破綻している。

「中華民族」理論が今後どれほどの効果をもたらすかは未知数ではあるが、いまのところ「西部大開発」を補完する役割をはたしているものと思われる。後者が少数民族地域の経済的浮揚を目的とするのに対し、前者は「西部」が中国にとって不可分の領土であると同時に、少数民族も中国国民の不可欠の構成要素であることを闡明することが目的であるらしい。「西部大開発」という事業と「中華民族」という理論とは、補完する関係にある。

本研究は、研究期間中、中国独自の民族理論の展開過程を視野に入れつつ、モンゴル族と朝鮮族における双語制の分析をこころみた。

4. 研究成果

本研究は、中国の少数民族政策を歴史的に俯瞰しつつ、改革開放以降、モンゴル語と朝鮮語の基盤が徐々に浸食されつつも、憲法が保障する民族平等原則の枠内で、両言語を振興する方策がとられつつしていることを調査した。少数民族は自己の言語文字を使用し発展させる自由を有する一方、双語制のもとで漢語と接触しながら民族語を維持継承する方途を模索している。

吉林省ならびに内モンゴル自治区に点在する朝鮮族とモンゴル族の教育機関を实地

調査し、少数民族教員との意見交換をとおして、経済成長にわく中国社会の、もうひとつの側面をうきぼりにすることができた。

東北三省（黒龍江省、吉林省、遼寧省）に散在する、約 192 万人の朝鮮族は従来、共同して朝鮮語規範を定めてきたにもかかわらず、綴字法の統一が崩れつつある。中華人民共和国の建国以来、朝鮮族は朝鮮民主主義人民共和国の言語規範をほぼ全面的に受容してきたものの、1992 年の大韓民国との修交以来、南北朝鮮の言語規範のあいだで朝鮮族が動揺している現状を明らかにすることができた。

中国の民族政策は憲法と民族区域自治法を根拠としているにもかかわらず、民族区域自治制度は 1950 年代後半からつづいた「地方民族主義批判」および「文化大革命」による混乱が収束するまで、約 20 年間、ほとんど有名無実であった。

朝鮮族は文革終了後、人治ではない法治の体制を確保するために、いち早く「自治条例」を制定している。研究代表者は、延辺朝鮮族自治州における最高学府である延辺大学に客員研究員として滞在し、「語言文字工作条例」を入手して、同条例が制定された経緯と意義について論文にまとめた。こうした条例は、その後、他の少数民族地区でも実施されることになった。

本研究は、モンゴル族、朝鮮族における言語維持の問題を現地調査する過程で、市場経済化が諸民族の矛盾を糊塗する唯一の手段とみなされる一方、その実現は多難であることを示唆した。辺境地域の景気浮揚を目的とする「西部大開発」によって、民族文化の保持と経済的発展との狭間で試行錯誤する少数民族のモノグラフィーとして、本研究の意義はあるだろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

- ① フフバートル、少数民族語から見た中国の「国家語」名称—「国家通用語」名としての「普通話」の可能性—、学苑、査読有、No.820、2009、pp.59—72
- ② 佐藤喜之、フフバートル、李守、中国少数民族における言語維持・言語継承の諸問題—モンゴル族と朝鮮族のばあい—、日本言語政策学会第 11 回大会予稿集、査読有、2009、pp.30—38
- ③ フフバートル、中国におけるモンゴル民族の文

字問題—中国語の文字改革との関連性を視野に
一、Proceedings of the Second International
Conference “Past and Present of the Mongolic
Peoples” 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文
化研究所、査読有、7巻、2009、pp.388—391

④李守、漢字の国のハングル—中華人民共和
国・延辺朝鮮族自治州における言語条例をめぐ
って一、学苑、査読有、No.811、2008、pp.44—53

⑤フフバートル、ことばの変容にからみた「東モン
ゴル」—内モンゴルの言語統合と東部方言
一、近現代内モンゴル東部の変容(アジア地域
文化学叢書)雄山閣、査読有、2007、pp.346—
371

⑥李守、文字の政治学 —昭和女子大学図書館
所蔵『朝鮮語文』について一、学苑、査読有、
No.797、2007、pp.52—60

⑦李守、中国朝鮮族における言語規範—綴字法
を中心に一、日本言語政策学会第9回大会予稿
集、査読有、2007、pp.38—40

〔学会発表〕(計7件)

①フフバートル、内モンゴルにおけるモンゴル語
のラジオ・テレビのことばの問題について、Third
International Conference “Past and Present of
the Mongolic Peoples”、2009年8月27日、
Ulaanbaatar, Mongolia

②フフバートル、Investigation of the Present
Situation of Nationality Education in the
Western Part of Inner Mongolia —The Case in
Eznee Banner of Alashan League—、The
16th World Congress of the International Union
of Anthropological and Ethnological Sciences、
2009年7月29日、Kunming, China

③佐藤喜之、フフバートル、李守、中国少数民
族における言語維持・言語継承の諸問題—モン
ゴル族と朝鮮族のばあい—、日本言語政策学
会第11回大会、2009年6月14日、昭和女子大学

④李守、朝鮮族の‘bilingualism’からみた中国の
‘multilingualism’東京外国語大学アジア・アフリ
カ言語文化研究所「多言語状況の比較研究」、
第3回研究会、2009年2月14日、東京外国語大
学

⑤フフバートル、新疆におけるモンゴル人の文
字問題について、「トド文字360周年」国際シンポ
ジウム、2008年9月13日、モンゴル国ホブド大学

⑥フフバートル、中国語におけるモンゴル文字
の民族問題—中国の文字改革との関連から—、
Second International Conference “Past and
Present of Mongolic Peoples” 2007年8月28日、

Ulaanbaatar, Mongolia

⑦李守、中国朝鮮族における言語規範—綴字
法を中心に一、日本言語政策学会、2007年6月
17日、麗澤大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

李 守 (LEE SU)

昭和女子大学・人間文化学部・准教授
研究者番号：80276617

(2) 研究分担者

佐藤 喜之 (SATOU YOSHIYUKI)

昭和女子大学・人間文化学部・教授
研究者番号：50307010

呼 和 巴 特 爾 (HUHBATOR)

昭和女子大学・生活機構研究科・准教授
研究者番号：80338540

(3) 連携研究者

なし